

トマス・アクィナス 『ボエティウス「三位一体論」註解』の意義

桑原直己

【1】はじめに

トマス・アクィナスの『ボエティウス「三位一体論」註解』（通称 *Expositio in Boetii De Trinitate*、以下 EBT と略記）と題する小品^{*1}は、トマスの学問論がまとまって展開されている重要なテキストである。そこで展開されている学問論は、トマスの主著として知られる『神学大全』（以下 S.T.）全体の内容である「聖なる教え *sacra doctrina*」そのものの性格をその冒頭において規定している S.T. I q.1 に直結するものである。

ところで、この EBT は『註解』としてはきわめて特異な特徴を示している。まず、ボエティウス『三位一体論』そのもののテキストは序と六つの章からなるが、EBT では序と第一章と第二章の前半までしか註解していない。その限りで明らかに未完の書である。さらに、トマスの註解書は普通、対象となるテキストを細かく「講 *lectio*」に区分し、これに詳細な解説を施してゆくのが常であるが、この EBT では、序と第一章と第二章とにそれぞれ簡潔な註解を施した後、そのそれぞれに「異論、反対異論、主文、異論回答」といういわゆる「討論集形式」による「項 *articulus*」からなる「問題 *quaestio*」が二つずつ配されるという二重構造を示している。

そうした事情から、EBT についての評価は長らく論争的となり、これに伴い著作年代についても様々な説が唱えられてきた。しかしながら、幸い EBT にはトマスの自筆

*1 テキストとしては以下の版がある。

Sancti Thomae de Aquino *Opera omnia* iussu Leonis XII P. M. edita, t. 50, Roma / Paris 1992, pp. 136-171. (レオ版)

Sancti Thomae de Aquino *Expositio super librum Boethii De Trinitate* ; ad fidem codicis autographi nec non ceterorum codicum manu scriptorum recensuit Bruno Decker, Leiden : E.J. Brill , 1959. (デッカー版)

S. Thomae Aquinatis *Opuscula theologica*, vol. II : De re spirituali, cura et studio Raymundi M. Spiazzi, accedit *Expositio super Boethium De Trinitate et De hebdomadibus*, cura et studio M. Calcaterra, Marietti, Torino / Roma 1954 / 1972, pp. 361-389. (マリエッティ版)

Thomas von Aquin, *In librum Boethii De Trinitate quaestiones quinta et sexta*. Nach dem Autograph cod. Vat. lat. 9850 mit Einleitung herausgegeben von Paul Wyser, Fribourg / Louvain 1948. (ヴァイザー版)

邦訳としては

長倉久子訳註『トマス・アクィナス神秘と学知－『ボエティウス「三位一体論」に寄せて』翻訳と研究－』、創文社、1966

なお、テキストの訳文は基本的に上記長倉訳に依拠するが、必要に応じて適宜改変をほどこす。また、筆者自身によるテキストの引証は研究者がよく依拠するデッカー版による。

原稿が保存されており、文献学的研究が進んだ結果、著作年代についてはかなり明らかになり、最近の研究によれば、EBTの執筆はいわゆる第一回パリ大学時代初期にあたる1256-59年頃と推定されている^{*2}。これは『命題集註解』の後、『対異教徒大全』の前にあたる。

またEBTの論述は高い完成度を示しており、その内容も「註解という形式を借りながら、自らの「神学序説」を展開する」^{*3}のものである。ここから現在では、EBTは「註解」と称してはいるものの、むしろトマス自身の学問論の構想を明らかにすることを目的とした著作と見る見方が有力となっている。こうした視点から見ると「註解の講」と「討論の項」という二重構造も、その目的のために意図的に採用されたことになる。さらには、EBTがボエティウス『三位一体論』の註解としては途中中断の形になっているのも、トマスがそこまで所期の目的を達成したと判断したため、ということになる。

筆者は、トマスの学問論を解明するために、EBTの意義を検討する一連の論攷を企図している。本稿ではまずEBT全体の内容を概観すべく、トマス自身が附している序を検討し、さらにはボエティウス自身の序文およびこれに関連する二つの「問題 *quaestiones*」を取り上げ、特に両問題諸項の主文を中心にそれらの意義を検討することとしたい。

【2】 トマス・アキナスによる序文とEBTの全体構成

(一) トマス・アキナスによる序文に見るEBTの主題・方法・目的

EBTの全体は、まずトマス自身が付した序文^{*4}からはじまる。長倉久子はこの序文に注目し「ここで彼はボエティウスのこの書（ボエティウス『三位一体論』）を「神学書」として性格づけ、他の神学的小品との有機的連関を示し、その内容・方法・目的を明らかにしているが、それは彼がなぜことさらにこの書を取り上げたか、その理由を暗示しているとともに、また彼が神学のマギステルとして企てている神学刷新の道をも示唆している」^{*5}と指摘している。以下にこの序文を概観したい。

人間の「自然本性的認識の過程に従えば、理性はより後なるものからより先なるものへ、被造物から神へ至る」、つまり、感覚によって捉えられるものの認識から出発し、その原因や原理に遡っていく形で神に接近する他はない。しかし人間は「神から無限に隔たっている」ので、「被造物を通して神を認識しようとする者は、多くの誤謬に陥った」。それゆえ、「神は人間精神に信仰を通じて御自身の知 *notitia* を注入し、人類に認識の別のもう一つの安全な道を配慮し給うた」と言う。「自然本性的認識の原理（出发点）が感覚から受け取られた被造物の知 *notitia* であるように、上から与えられた認識の原理は、信仰によって

^{*2} Hall, D.C., *The Trinity: an analysis of St. Thomas Aquinas' Expositio of the De Trinitate of Boethius*, Leiden: E.J. Brill, 1992, p.41

^{*3} 長倉前掲書、p.58

^{*4} EBT, prologus

^{*5} 長倉前掲書、p.57

注入された第一真理の知である」。前者の道をとる哲学者たちによる探求は、「自然本性的秩序に従って被造物に関する学知 *scientia* を神的学知に、すなわち自然学を形而上学に先行させている」が、後者の道をとる神学者は、「その反対の仕方では考察が進められ、創造主の考察が被造物の考察に先行している」。ボエティウスは神学者として後者の秩序に従い、「自己の考察の原理を事物の至高の起源そのもののうちに、すなわち、一にして単純なる神の三性（三なること）のうちに、指定した」。

ここからトマスはボエティウスの主題、方法、目的を以下のように見定める。

ボエティウスによるこの著作の主題は、「神的知恵が御父から永遠的に生まれる第一の誕生より生ずる」ところの「一なる神的本性におけるペルソナの三性」である。ボエティウスの教えは三つの部分に区分される。第一の部分は「ペルソナの三性」に関して、特に他の誕生あるいは発出（つまりは被造物の創造）がこれに由来するところのそれらのペルソナの発出について論じている。第二の部分は、「善なる神からの善なる被造物の発出」に関する部分である。第三の部分は、「キリストによる被造物の回復」に関する部分である。この第三の部分はさらに「キリストが教え、それによって我々が義化される信仰」の提示と、「キリストについて何が判断されるべきか、すなわち、いかにして二つの本性が一つのペルソナにおいて一致するか」が説明される部分とに分かたれる、と言う。

以上「ペルソナの発出」「被造物の創造」「キリストによる被造物の回復」という三つの主題に対して、トマスはボエティウスが『三位一体論』以外に著した神学的著作をそれぞれ対応づけている。なお、この三つの主題は後にトマス自身が展開する『神学大全』の基本構成にもなっている点に注意を喚起しておきたい。

次にボエティウスの方法についてであるが、トマスはまずアウグスティヌスに依拠して、三位一体論を扱う上で二つの方法、すなわち「権威による方法」と「理性による方法」があることを指摘する。その上で「ボエティウスは、他の人々によって権威によって追究 *prosequi* されたところのものを前提として、もう一つの方法、すなわち理性によって追究するものを選んだ」としている。

最後にこの著作の書かれた目的は「理性において可能なかぎり、信仰の隠れたることが明らかになることである」と言う。長倉は「トマスの膨大な著作もまた、この目的のために書かれていく」と言う^{*6}。

（二） EBT の全体構成

以上概観してきたトマス自身の序文から、長倉はトマスが本書全体で明らかにしようとする問題に対する示唆を見て取っている。すなわちそれは、「(一) 人間の自然本性的認識 — 特に真理と神の認識に関しての可能性と限界、(二) 信仰と理性との関わり、(三) 信仰の正当性と正統性、(四) 知恵の探求の営み（諸学）における「神学」の位置づけのない哲学と神学との関わりに関する問題である」^{*7}。続いて、これらの問題が具体的にどのよう展開しているかを、EBT の全体構造の中から概観することとしたい。

^{*6} 長倉前掲書、p.58

^{*7} *ibid.*

まず、ボエティウスによる序文の註解からは、(一) 真理および神認識に関する人間知性の可能性および限界を明らかにするという、いわば認識論を内容とする第一問題と、(二) 信仰に属することがらを理性によって探求し表現することの正当性、つまり学知としての神学の成立可能性とその特殊性を検討する第二問題が提起される。

次いで、ボエティウスのテキスト第一章註解の箇所ではトマスは六章から成るボエティウスのテキストを二つの主題に区分する。すなわち、(1) アリウス派の異端に対して父と子と聖霊の神としての同一性ないし神の本質の一性を論じる第一・二章と、(2) サベリウスの異端に対して父と子と聖霊の三つのペルソナの問題を取り上げた第三章以下である。この前半(1)の部分はさらに三位一体に関するカトリック信仰が呈示される第一章と、その教説を検討する第二章から構成されている。

この第一章の分析から二つの問題、すなわち、信仰の正当性と普遍性とを検討する第三問題と、三位一体の教説に関する誤謬の起因としての「多の原因」を検討する第四問題が提起される。これら二つの問題が上記(三)に相当する。

第二章は三位一体に関するカトリック信仰の検討を内容とするが、ボエティウスが彼の三位一体論を展開するのはこの章の後半からであり、章の前半部分は、三位一体を主題として考察するに先立ついわば方法論的考察である。そしてトマスはこの部分の註解から二つの問題を提起する。すなわち、観照的学の区分とそのそれぞれの部門における対象ないし主題の相違を解明する第五問題と、そのそれぞれの部門に固有な方法を明らかにする第六問題である。これら二つの問題が上記(四)に相当する。

ここでトマスの註解および「討論集」形式の問題は終わるのであり、ボエティウス自身の三位一体論についての展開にはトマスは立ち入ることなく本書は閉じられている。

【3】 ボエティウス自身の序文に対する註解

次いで、ボエティウス自身による『三位一体論』の序文に対してトマスが付した註解を概観しておこう*8。この「序文」に関連して、本稿で検討する第一問題、第二問題のテーマが提示されるからである。

トマスの解説によれば、ボエティウスはこの著作『三位一体論』の序文で三つのことを行っている。すなわち、(1) 第一に、簡潔に著作の「諸原因」を述べ、こうして聴聞者が教えに入り易いようにしている。(2) 第二に、「弁解」を付し、そこで聴聞者に好感を抱かせている。(3) 第三に、自己の著作の起源及びいわゆる基盤はアウグスティヌスの教えであることを示し、それによって聴聞者の注意を喚起している。

(1) 著作の「諸原因」について、トマスはアリストテレス的な四原因説に即して整理している。(1-1)「質料因 *causa materialis*」は「長期に互る探求 *investigatio* を必要とした主題 *materia*」、すなわち「一なる神のペルソナの三性(三つであること)について」である。(1-2)「作出因」として、神的光が主要原因であり、人間精神(著者の知性)は二次的原因であることが示される。(1-3)「形相因」に関しては三つの要素が触れられる。すなわち、(1-3-1)「証明によって進めること」、(1-3-2)「ただ言葉によって説いたに止まらず、また

*8 EBT, *expositio prooemi*

文字にも付したということ」、(1-3-3)「居合わずものに教授という仕方でしたのではなく、不在者に書簡の形で著したということ」である。(1-4)「目的因」としては「神的真理の把握」という主要目的、続いて「知者」すなわち本書が献呈されている相手であるシュンマクスの判断を求める、という二次的目的を説明している。

(2)「弁解」は二つの点、すなわち(2-1)第一に著作の難解さ、(2-2)第二に著作の不完全さについてなされている、と言う。

(2-1) 著作の難解さはさらに三点に区分される。すなわち(2-1-1)第一は「記述の簡潔さからくる難解さ」、(2-1-2)第二は「彼が導入する精妙な論拠に由来する難しさ」、(2-1-3)第三は「新語による難解さ」である。こうした難解さは、ボエティウスが周囲の敵を警戒して「故意にこの著作にもたらしめている」ことが指摘されている。なお、これらの難解さは、(2-1-4)本来の難しさ、すなわち「主題の難しさ」に加わるものであった。

(2-2) 著作の不完全さについては「人間理性の判断を超える最も難しい内容が扱われているのであるから、著者が問題を完全な確実性にもたささないとしても、彼はむしろ「寛恕」されるべきである」ということであった。

(3) 第三に、ボエティウスは自著がアウグスティヌスにもとづいていることを示し、本書において自分がアウグスティヌスの「種子」から得た「果実」が適切であるか否かを、本書が宛てられたシュンマクスに判断を仰いでいる、という。

トマスは以上のようにボエティウス自身の序文を解説し、その末尾で「二重の問題が起こる。第一は、諸々の神的ことがらの認識についてであり、第二は、それらの顕示についてである」としている。これらが本稿で検討する「討論集」形式による二つの「問題 quaestiones」のテーマとなる。

【4】 第一問題－神学成立の前提としての認識論的基盤

第一問題は「神的ことがらの認識について」と題しているが、そもそも「神学」なるものが成立するための認識論的な前提が問われている。

(一) 人間精神は真理の認識のために神的光の新たな照明を必要とするか^{*9}

第一項では、トマスはいわゆる「照明説」を論駁して人間の知性的能力に一定の自立性を認める一方で、その能力の限界をも明らかにしている。

本項の背景として、長倉は「当時、真理の認識のためには人間の自然本性に与えられている能力では不十分で神的光の新たな照明を必要とする、という照明説が神学者たちの間になりに広まっていたから」と指摘する。そして「この照明説は、アウグスティヌスに淵源し、更に十三世紀初頭から翻訳によって知られるようになったアヴィセンナの説に論理的に依拠していた」と言う^{*10}。

アリストテレスはその『靈魂論』において、知性に「能動知性 *intellectus agens*」と、受動的な「可能知性 *intellectus possibilis*」とを区別したが、両者の関係の詳細については

^{*9} EBT, q.1 a.1 c.

^{*10} 長倉前掲書、p.73-4

明らかにはしなかったもので、長きにわたり解釈上の問題点となっていた。

トマスはアヴィセンナの名を挙げているが、彼に代表されるアラビアの哲学者たちに見られるそれまでの解釈の主流は、ただ可能知性のみが魂の能力であり、他方、能動知性は万人の魂からは離在する「何らかの分離実体」であると理解されていた。かかる見解によれば、「人間の魂は、外的光 *exterius lumen* の照明、すなわち彼らが能動知性と呼ぶところの分離実体の照明を受けることなしには、固有の働きを、すなわち真理の認識を現実に行うことはできない」ということになる。

こうした伝統に対してトマスは、アリストテレスは「むしろ、能動知性は魂の能力であると言っているように思われる」^{*11} との独創的な^{*12} 解釈を示している。「従って、知性的働きに関しては、すなわち真理の認識に関しては、魂の中に受動的能力も能動的能力も措定され」、「自らのうちに能動的能力と受動的能力とをもつ魂は、真理を把握するのに十分である」^{*13} ということになる。これが人間の知性的能力の「一定の自立性」である。

ただし、「新しい可知的光は要求されず、自然本性的に賦与された光で十分である」とされるのは、あくまでも能動知性の効力の及ぶ「人間が自然本性的に認識する諸原理やそれらの原理から演繹されることから」などについての認識に限定される。これに対して、「理性の能力を超える信仰に属することがらであるとか、将来の偶然的出来事」のようなことがらの認識は「人間精神が神から自然本性的光 *lumen naturale* に付加された新たな光 *novum lumen* によって照らされなければ、不可能である」^{*14} とされる。

ここで長倉は「トマスは、自然の領域における認識においても、照明論者たちの主張するように、人間精神は不完全で誤謬に陥りやすく、真理の認識を得るのは容易でないことを十分に理解している。それゆえ、このことは認識における信仰の必要性の問題として第三問題で論じられることになる」と指摘している^{*15}。

(二) 人間精神が神の認識に到達することは可能であるか^{*16}

第二項では、果たして人間精神が第一の真理である神を認識することができるのか、できるとすれば神について何を認識できるのかが問われている。

まずトマスは、もの *res* の認識の様態を分類する。すなわち、

- (1) 「一つはそのもの自身の固有の形相によって認識される場合」であり、「例えば目が石を石の形象によって見る」ようにである。この様態はさらに、二つの仕方に区分される。
(1-1) 一つは、「そのもの自身であるところの形相によるもの」であって、「例えば神が自己の本質を通して自己自身を認識し、また天使も自己自身を認識しているように」である。

^{*11} EBT, q.1 a.1 c., デッカー版 p.60,l.5

^{*12} トマスによるかかる能動知性解釈の意味と独創性については以下の拙稿を参照。

拙稿「トマス・アクィナスにおける『能動知性』と『個としての人間』」、(『哲学』第47号)、日本哲学会、1996、p.197-206。

^{*13} EBT, q.1 a.1 c., デッカー版 p.60,l.10-13

^{*14} EBT, q.1 a.1 c., デッカー版 p.61,l.2-6

^{*15} 長倉前掲書、p.74

^{*16} EBT, q.1 a.2 c.

(1-2) もう一つは、「そのもの自身に由来する形相によるもの」であるが、かかる形相にはさらに二つの種類がある、と言う。すなわち、

(1-2-1) 一つは、「そのものから抽象されたもの」で、「形相がものそれ自身よりも一層非質料的な場合」である。「例えば、石の形相が石から抽象されるように」である。

(1-2-1) もう一つは、「そのものが知性に刻印するもの」で、「ものが、それによって認識されるところの似姿よりも一層単純な場合」にみられる。これは、アヴィセンナが主張するところの「我々は知性実体 *intelligentia* を、我々のうちにある知性実体の刻印によって認識する」と言われる場合の認識様態である。

(2) 「もう一つは、そのもの自身に類似した他のものの形相による場合」であり、「例えば原因が果の類似を通して、また人が自己の像の形姿によって、認識される」ようにである。

以上認識の様態を分類した上で、トマスは神認識の可能性について次のように答える。

(1-1) による神認識、つまり「神自身を、神の本質であるところの形相を通して認識すること」は、現世においては我々の知性は「感覚から抽象された形相に対して規定された或る一定の関係を有している」がゆえに不可能である。しかしながら、天国においては至福者たちによって、この仕方では神は認識される、と言う。

(1-2-1) による神認識も不可能である。「神の本質はいかなる被造的形相をも無限を超えており」「知性にとって神は被造的形相を通して近づきうるものたりえないから」である。

(1-2-2) つまり「神が我々によって純粹に可知的形相を通して認識される」ということもない。「かかる形相は神の何らかの類似であることになろうが、我々の知性は表象に対して同じ本性をもつからである」。

それゆえ、残るところは (2)、つまり「神はただ (神の) 果 (なる被造物) の形相によってのみ認識される」ということになる。ところで、果には二つの種類がある。

(2-1) 「或る果はその原因のちから *virtus* に等しいもの」であり、「かかる果を通しては原因のちからは十分に認識され、その結果、原因の何性 *quiditas* が知られる」。

(2-2) 「もう一つの果は、上述の等しさを欠くもの」であり、「かかる果によっては能動者のちから *virtus agens* を把捉することはできず、従ってまたその本質も把捉されず、原因についてはただ「それが在ること *quod est*」だけが認識されるにすぎない」と言う。神に対するすべての果のあり方は (2-2) であるので、「現世の状態にあつては、我々は神についてただ「神が在ること *quia est*」の認識以外には到達しえない」と結論づけられる。

ただし、果を通じての原因の果に対する関係 *habitus* の把捉の程度に応じて、「(原因である神が) 在る」ことについての認識にも程度の差がある。果と原因との落差は三つの視点から見出される。すなわち、

(2-2-1) 原因からの果の発出に従って、

(2-2-2) 果がその原因の類似を獲得することに従って、

(2-2-3) 果が類似の完全な獲得より欠落することに従って、である。

かくして、三様の仕方では人間精神による「(原因である神が) 在る」ことについての認識の進歩が考えられる。

(2-2-1) 第一は、「神の事物産出における効力がより完全に認識されるに従って」である。

(2-2-2) 第二には、「諸々のより高貴な果の原因が認識されることによって」である。「それらの果は、より多く原因の卓越性を表している」からである。

(2-2-3) 第三には、「原因が果に表れているすべてのものから遠く離れたものであることがより一層よく認識されていくことにおいて」である。それゆえ、「ディオニシオスは、『神名論』において、神は、万物の原因であることから、そして万物を超過し、万物を除去することから知られる」と言っている。いわゆる「否定神学」が成立する場面である。

ところで、以上の認識の進展において、人間精神が最もよく授けられるのは、その自然本性的光が新たな照明 — 例えば、信仰と知恵と聡明の賜物の光 — によって強固にされる場合である。「その光によって（人間）精神は、自然本性的に把握するすべてのものを神は超えていると認識する限りで、観想において自己以上に高められると言われる」。

しかし時にまた「精神は、神の本質を観るまでに透徹する力はないから、何らかの仕方で卓越した光によって自分自身に突き戻される」とも言われる。

現世における人間の知性認識は感覺的認識に由来する表象からの能動知性による抽象による、というトマスの経験主義的な認識論は第一項でも大きな意味を持ったが、本項では(1-1) (1-2-1) (1-2-2) の可能性を遮断する上でも決定的な役割を演じている。特に (1-2-2) ではアヴィセンナの認識論が名指して言及されている点に注意を喚起しておきたい。

(三) 神は精神によって認識される第一のものであるか^{*17}

第三項では、上記の問いのもと、人間による神の認識はいかにしてなされるかが解明される。

まず、「人間精神によってこの世においても認識される第一のものは神自身であり、神は第一の真理であって、それによって他の一切のものが認識される」とする見解に対してトマスは、「神を本質によって認識することは人間の至福であるゆえ」、「すべての人間は至福者であることになり」、また「誰も神について言われることがらに関して誤ることはない」という明らかに事実と反する帰結が生じるとして斥ける。

また、「神の光の流入がこの世において我々によって第一に認識されるものであり、この限りで神は我々によって認識される第一のものである」と唱える別の見解に対しては、「神によって精神のうちに流入した第一の光は自然本性的光であり」、「自然本性的可知的光の流入は、我々によって認識される第一のものではありえない」として斥ける。

トマスによれば、「人間にとって第一に認識されるもの」は、(1)「種々の異なった能力の次元 *ordo* に即して」、また (2)「一つの能力における諸々の対象の次元に即して」解されうる。

(1) の仕方では「我々の知性の認識はすべて感覚から由来するのであるから、感覚によって認識されうるものは知性によって認識されうるものよりも、つまり、個別的或いは可感的なものは可知的なものよりも、より先に我々に知られる」。

(2) の仕方では「第一に認識されうるものはその固有の対象」であるが、「能動知性が可知的なものにするのは、分離の形相ではなく、知性が諸々の表象から抽象するところの形相である」ので、「抽象作用を行う知性に第一に現れるところのもの」が第一のものであることになる。そしてそれは「多くのものを、或いは普遍的全体という仕方で、或いは

^{*17} EBT, q.1 a.3 c.

総体的全体という仕方で、包含するもの」である。また感覚においても「より共通的な個々の物が第一に知られる」。

以上からトマスは、神やその他の分離実体は、いかなる仕方で第一に知られるものたりえないとし、神は「他のものから知られる」と結論づけている。

第一項の場合と同様、長倉によれば、本項で批判されている見解は「アウグスティヌスやアンセルムスを奉じる人々の間に広まり、とくに十二世紀から十三世紀にかけて広く支持されていた。フランシスコ会学派の人々もおおむね、このような考えを奉じていた」^{*18}という。そして、その批判はやはり能動知性に対する経験主義的な解釈にもとづくトマスの認識論を基盤とするものであった。

(四) 人間精神は神の三位一体性の認識に到達するために十分であるか ^{*19}

第四項では、人間精神がいかに三位一体の認識に関わりうるのかが問われている。

「自然理性によって神について我々が認識しうるのは、ただ諸々の果の神に対する関係から神について知られることのみである」。「ところで、神の原因性は三位一体全体に共通であるから、ペルソナの三なることは、神の原因性そのものからは知られることができない。また除去することによっても表現されない」。それゆえ、「神が三であり一であることは、ただ信じられるものであり、それはいかなる仕方で論証的に証明されることはできない」ということになる。

三位一体について理性を用いて探求しようとしていた「ボエティウスの『三位一体論』への関心が高まった十二世紀には、三位一体を論証しようとする人々（例えばサン・ヴィクトルのリカルドゥス）さえいた。或いはまた、アウグスティヌスを奉じる人々の中に、被造界に三位一体の反映を見出して、そこから三位一体を理解しようとする人々がいた」^{*20}という。しかしトマスは神の三位一体性に対するそうした自然本性的認識の可能性についての主張を斥けている。

以上、第一問題においてトマスは神学の前提となる認識論上の問題を批判的に吟味している。ここで決定的な役割を果たしているのは能動知性に対するトマスの経験主義的な解釈である。他方、長倉は「超越する神の本質はただ否定によってのみ知られること、論証によっては証明されえない啓示された信仰箇条があることは、第五問題と第六問題への布石となっている」^{*21}と指摘している。

^{*18} 長倉前掲書、p.75-6

^{*19} EBT, q.1 a.4 c.

^{*20} 長倉前掲書、p.76

^{*21} 長倉前掲書、p.77

【5】 第二問題 — 神の認識の顕示について

第二問題は「神の認識の顕示 *manifestatio* について」と称しており、学知 *scientia* としての神学が成立する可能性とその特殊性について解明している。

(一) 神的事がらを探求という仕方で *investigando* 扱うことは許されるか^{*22}

第一項の「表題」は上記のとおりであるが、テキストは「神的事がらを論議という仕方で *argumentando* 探求することは許されるか」という問いに導かれ、結局信仰と理性的探求との関係が問われている。

まずトマスは、「人間の完成は神に結合されることにあるから、人間は自己の全能力を用いて能うかぎり神のことがらに導かれ、知性は神のことがらの観想に、理性はその討究 *inquisitio* にいそしまねばならない」との基本的な立場を示す。

しかしながらトマスは、このことに関して人間が誤ちを犯しうる三つの可能性を挙げている。(1) 第一は、「思いあがり」すなわち、「あたかも神のことがらを完全に把握しようとするかのようにそれを詮索する」誤りである。(2) 第二の誤りは「信仰に属することがらにおいて理性が信仰に先んじて信仰が理性に先んじないこと」、つまり「理性によって見出しうることのみを信じようとする」場合である。(3) 第三は、「自分の能力の限界を超えて神のことがらの詮索を自分に課すことから生じる」。すべての人が同じ度合に達するのではなく、「ある人の能力の範囲内にはあるが他の人にはそれを超える」、ということがある。

長倉によれば「神に関することがらは信仰の対象であって、それを理性によって探求することは不敬虔であり許されないのではないか、という問は、既に教父たちが問題としたものであった。この信仰と理性の関係に対して、一方の極端には、「不合理なるがゆえに我信ず」とか「エルサレムとアテナイの間に何の関係があるろうか」といった定式によってよく知られているテルトゥリアヌスに代表される理性排斥の立場があり、他方の極端には、信仰の対象であるもののすべてを理性的に探求し合理的に説明しようとする合理主義的神学者の立場がある。正統とされる教父たちは、この中間にあって、信仰を堅持しつつ理性による探求を怠らなかつたのであるが、トマスの時代にも、こうした対立は多かれ少なかれなお存在していた」^{*23} と言う。

トマスの立場も上述のとおり中道を示すものであるが、力点は後半の過ちを犯しうる危険性に対する警告にあったように思われる^{*24}。

(二) 神的事がら *divina* について何か或る学知 *scientia* がありうるか^{*25}

第二項は「神的事がら *divina* について何か或る学知 *scientia* がありうるか」と題して

^{*22} EBT, q.2 a.1 c.

^{*23} 長倉前掲書、p.78

^{*24} Hall, *op.cit.*, p.71

^{*25} EBT, q.2 a.2 c.

いるが、要するに「聖なる教え」の「学知」としての成立可能性が問われている。

トマスは「学知」の特質を、「知られたことがらから他のことがらが必然的に結論される」という点に求める。その上でまず、神的事がらに関する知 *notitia* を二種類に区分する。

すなわち、(1) 第一は「我々の側から」の知であり、「この場合、神的事がらが我々にとって認識可能であるのは、ただ被造物を通してのみであり、被造物の認識は、我々は感覚を通して受けとる」。このことにもとづく学知は「神的事がらを知られたものとするために諸々の感覚的なものを原理として受け容れる」のである。「こうした仕方では、第一哲学を神的事がらと呼び、神的事がらに関する学知を伝えた」と言う。

(2) 神的事がらについての第二の知は、「神的事がらの本性に基づくものであり、この場合、神的事がらはそれら自身によって最高度に認識可能」とされる。「こうした知り方は、現世においては完全には我々に不可能であるが、しかし、我々に注入された信仰によって第一真理そのものをそれ自身のゆえに堅持する限りで、現世において、こうした認識の或る分有と神の認識への或る類似化が我々に生じる」と言う。

「我々は、第一真理を堅持し信仰によって受容したことがらに基づいて、我々の仕方では、原理から結論へ推論を進め、こうして他のものの認識に至る」。従って、「我々が信仰によって奉じることがらは、我々にとってあたかもこの学知における原理のようであり、他のものはあたかも結論のようである」。こうして、信仰を原理（出発点）とする学知の成立が結論づけられる。そして (2) によるこの学知は、「より高い原理から発しているのだから、哲学者たちが伝えたかの神的事がら知識よりもより高次のものである」とされる。

「聖なる教え」の内容は、上述 (2) にあたる神に関する信仰に属することがらである。だとすると、「聖なる教え」を他の諸学と並んで「学知 *scientia*」の名に値するものとして、就中アリストテレス的な厳密な意味における学知の概念に適うものとして、組織立て体系化することができるのか、という点について当然疑問が提起されることになる。一般には、万人に自明の原理から出発するものであることが「学知」に不可欠の条件と考えられていたからである。

D・C・ホールは、トマスはここで神学（聖なる教え）が学知であることに「証明」を与えているわけではなく、適合性にもとづく類比を与えているに過ぎない、と指摘している^{*26}。少なくとも、トマスはここで「聖なる教え」が厳密にアリストテレス的な意味における学知である、と主張している、というよりは「学知」の概念にある種の拡張を加えている、と言ってよからう。

まずトマスは学知の特質を、「知られたことがらから他のことがらが必然的に結論される」という一点に絞る。そして、諸学における従属関係 *subalternatio* という事態を指摘する。「諸学はすべて自明の原理から出発するわけではない。或る学問において明らかにされた事柄を、他の学が前提として受け取り、信頼してその知を活用する場合のように（例えば医者が自然学者の言う四元素を信じるように）、諸学のうちに他の学に従属する学知がある。この従属する学知においては、その前提となる知がこの学知の専門家にとって

^{*26} Hall, *op.cit.*, p.74

は自明ではなく、従属される上位の学知の知識をもつ者にとって自明であることに信頼して、前提として受け取られる」のである。このように、「神学は啓示する神への信頼によって信仰箇条を受け取り、これを原理とし前提とするのである。それゆえ、信仰が出発点であることは、学知の出発点・源泉が知性認識であるということに反することはない」というわけである^{*27}。

しかし、「信仰箇条が真である保障はどこにあるのだろうか。トマスは、ここではただ「御自分の使者を通して我々に示される神に信頼してそれらが信じられる」と言うのみであるが、御自分の使者とは一体誰であるのか」。長倉はこの問題は第三問題で扱われることになる」と指摘している^{*28}。

(三) 信仰に関する学は神についてのものであるが、そこで諸々の哲学的論拠及び諸権威を用いることは許されるか^{*29}

第三項では、信仰ないしは神学のために哲学を「使用」する可能性が検討されている。

まずトマスは、有名な「恩恵 *gratia* の賜物は、自然本性に、それを廃棄せずかえって完成するという仕方で加えられる」という定式を提示する。ここから、「信仰の光もまた我々に神から生得的に与えられている自然理性の光 *lumen naturalis* を破壊しない」ということが帰結する。

ところで、「聖なる教えが信仰の光に基づいてたてられているように、哲学は理性の自然的光 *lumen naturale rationis* に基礎をおいている。「従って、哲学に属することがらが信仰に属することがらに対して対立することは不可能であり、むしろ前者は後者に比べて不足しているのである。「もし哲学者たちの言説の中に何か信仰に反対対立するものが見出されるなら、それは哲学に属するものではなく、むしろ理性の欠陥に由来する哲学の濫用である」。

従って、聖なる教えにおいて我々は哲学を三様の仕方で用いることができる、と言う。

(1) 第一は、「信仰の前提であるものを論証するため」である。「例えば神が在ることや神は一であることや、そのほか神に関して或いは被造物に関して哲学において証明されたこうした類のことがら」を信仰は前提とし、そうしたことがらは神について自然理性による諸論拠によって証明される。

(2) 第二は、「信仰に属することがらを何らかの類似によって知られるものにするため」である。例えば、アウグスティヌスが『三位一体論』において、三位一体を顕示するために用いている哲学的諸教説からとった類似がそれである。

(3) 第三は、「信仰に反して言われることがらに対して、それらが偽であることを示すこと、或いはそれらが必然的でないことを示すことによって対抗するため」である。

しかしながら、聖なる教えにおいて哲学を用いる人々は、二様の仕方で誤りうる。

(a) 一つは、「信仰に反することがらを用いる場合」である。それは「哲学に属するものではなく、かえって哲学の墮落或いは濫用」である。

^{*27} 長倉前掲書、p.81

^{*28} 長倉前掲書、p.82

^{*29} EBT, q.2 a3 c.

(b) もう一つは、「信仰に属することがらを哲学の圏内に閉じこめる場合」、つまり「哲学によって得られうるものしか人が信じようとしない場合」である。

本項における論点の背景について、長倉は次のように指摘している。「以上のようにトマスが哲学的神学（知恵）と啓示神学との関係を明確化することには歴史的な背景があった。すなわち、信仰の知的理解のために哲学を用いることは、既にキリスト教初期の頃から行われていたことであり、偉大な教父たちは哲学の援けを借りて教説を展開したのであるが、しかし、その中には異端説となったものもあった。それゆえ、哲学を用いることに対する反撥や危険視もあった。殊に十二世紀末から十三世紀にかけてアリストテレスの全体系とアラビアの哲学者たちの著作が知られてくるにつれ、これを危険視する人々も少なくなかったのである」*30。

こうした背景のもと、トマスは「恩恵の賜物は、自然本性に、それを廃棄せずかえって完成する」という確信のもと、真実の哲学は信仰に背馳するはずはない、という前提からこれを信仰に奉仕するものとして位置づける一方、哲学はいかなる形で濫用されうるかも明らかにして、これを戒める、という形で対応したのである。

(四) 神的事がらは諸々の不明瞭で新奇な言葉によって覆われるべきか *31

第四項は「神的事がらは諸々の不明瞭で新奇な言葉によって覆われるべきか」と題しており、神学における言語使用の問題を扱っている。

まずトマスは、「教える者の言葉は、聞く者に益になり害とならないように、適正なものでなければならない」という原則を提示し、そのもとで神的事がらの明示について以下のように自己の立場を明らかにする。

- (1) 聞かれても誰にも害を及ぼさないことがらは、隠すべきではなく、すべての人々に明らかに提示すべきである。
- (2) しかし、提示されると聞く人に害を及ぼすようなことがらについては、害を及ぼすかも知れない人々には隠されているべきである。このことは二様の仕方で行きうる。
 - (2-1) 第一は、信仰の奥秘 *archana* が信仰を嫌悪する不信仰者に明かされた場合に起こる。それというのも、信仰の奥秘が彼らによって嘲笑される結果になるであろうから。
 - (2-2) 第二は、何か捉え難い神秘 *aliqua subtilia* が無教養な人々に提示された時に、完全に把握できないことがらから彼らが誤謬の材料をうる場合である。

ところで、「語る場合には、同一のことがらが、知者たちには特別に明かされ、そして一般の人々には沈黙が守られる、という区別が可能である」。しかし、書かれた書物はどのような人の手にも渡りうるので、書く場合にはこのような区別をすることはできない。「従って、不明瞭な言葉によってそれらを包み隠し、こうすることによってそれらを理解する知者には益となり、それらを理解できない単純な人々には隠されているようにするべきである」と結論づけられる。

*30 長倉前掲書、p.84

*31 EBT, q.2 a.4 c.

本項の背景をなすのは、【3】(2-1) で言及されたところの、ポエティウスのテキストにある意図的な「難解な言葉の使用」をめぐる問題である。

ポエティウスの場合、アリウス派の敵対者に囲まれていた中で、この書物を献呈する相手、すなわち彼の庇護者であり同志であるシュンマクスにのみ理解してほしかった、という事情があった。いわば本項(2-1)である。他方、「トマスがこの問題を取り上げる背景には、哲学的専門用語を用い、体系立てて論述するスコラ神学に対する反撥、すなわち、聖なる教えは万人のためのものであるから、万人に理解されうるやさしい言葉が用いられるべきではないか、という反撥があった」と言う^{*32}。「修道院神学において情意に訴える雄弁で美しい文体が用いられていたのとは対照的に、スコラ神学の表現様式は難解で優美からはほど遠い」からである^{*33}。

それゆえに、トマスもまた上で概観したように、特に本項(2-2)のような形で、神学における難解な言語使用を正当化しなければならなかったのである。

【6】 結語

本稿では、EBTの全体構成について概観した後、特にその第一問題と第二問題とについて検討を加えた。

第一問題は、神学の前提となる認識論上の問題に対する批判的な吟味を内容とするものであったが、ここにおいて明らかになったことはトマスの経験主義的な能動知性解釈にもとづく認識論が演じる決定的な役割であった。

第一項でトマスは、いわゆる「照明説」を論駁して人間の知性的能力に一定の自立性を認める一方で、その能力の限界をも明らかにしている。これはまさに個人の魂に内在する能力として理解された能動知性が有する自立性、そしてその能動知性による人間の知性認識が感覚にその源泉を有することにもとづく制約による帰結であった。

第二項では人間精神による神認識の可能性が検討されたが、神を「そのもの自身の固有の形相によって認識する」可能性は経験主義的な能動知性論から現世の人間には不可能とされ、人間に可能な自然神学的な神認識は被造物を通じてその原因である神が「在る」ことのみに限定されることが示された。

そして第三項では、かかる能動知性による認識の特徴から、神は精神によって認識される第一のものではなく、人間にとってはむしろ後に認識されるものであることが示された。

第四項では、自然理性によって神について我々が認識しうるのは、ただ諸々の果の神に対する関係から神について知られることのみであるがゆえに、三位一体に対する自然本性的認識可能性の主張は斥けられていた。

以上の第一問題での解明を基礎として、第二問題では「学知 *scientia*」としての神学の成立可能性が検討されている。ここでは第一問題で明らかになった人間理性による認識の限界を踏まえ、神学（「聖なる教え」）が信仰から出発しているということと学知との関係

^{*32} 長倉前掲書、p.85

^{*33} *ibid.*

が問題の基本をなしている。

まず第一項では、信仰に対して理性的探求が果たすべき役割が明らかにされている。

そして第二項において、神学（「聖なる教え」）の学知としての成立可能性が正面から検討される。ここでは「学知」の概念がその厳密にアリストテレス的な意味から拡張されている。すなわち、トマスは学知の特質を、「知られたことがらから他のことがらが必然的に結論される」という一点に絞り、諸学における従属関係という事態とアナロジカルな形で、神学はいわば「上位の学知」が与える原理（出発点）として信仰を原理（出発点）とする学知である、としている。

第三項では、有名な「恩恵の賜物は、自然本性に、それを廃棄せずかえって完成するという仕方に加えられる」という定式のもとに、信仰ないしは神学のために哲学を正当に「使用」するための条件が明らかにされている。

最後に、第四項では神学における難解な言語使用の正当性が問題とされている。

第二問題では、「出発点」としての「信仰」の果たす役割の大きさがクローズアップされていると言える。そして、問いは「信仰」そのものの正当性を主題的に論じている第三問題へと連続してゆくのである。

The significance of the “*Expositio in Boetii De Trinitate*” of Thomas Aquinas

Naoki KUWABARA

“*Expositio in Boetii De Trinitate*” (EBT) of Thomas Aquinas is the important text in which his theory of *scientiae* (studies) is developed. In this report, I surveyed the total constitution of EBT, and especially I examined the issues in its first and second questions.

The contents of the question 1 were critical examinations about the epistemological problems that provide the premises for theology. Here, the decisive importance of Aquinas’ epistemology based on his empirical interpretation about the active intellect was made clear.

In article 1, Aquinas confutes the so-called “illumination theory”, and admits the self-subsistence of the human intellect to a certain degree, but he also shows the limit of its ability.

In article 2, the possibility of the recognition of God by the human mind was examined. As the result of the empirical theory about the active intellect, Aquinas denies the possibility to “recognize God by His own proper form” for a temporal human being. It was shown that the only possible natural theological recognition for human being is “that God is” through the creatures as their cause.

In article 3, as a result of the empirical character of the recognition by the active intellect, it was shown that God is not the first thing recognized by human mind, but recognized later than other things for human beings.

In article 4, the claim of the possibility of the natural cognition for the Trinity was rejected. For, what we can recognize about God by natural reason is only what he can know from His various effects through their relations.

Based on the above-mentioned elucidation made by the question 1, in the question 2 the possibility of the theology as a “*scientia*” is examined.

At first, in article 1, the role of the rational search for the faith is clarified.

And, in article 2, the very possibility of the theology as a “*scientia*” is examined. Here the concept of the “*scientia*” is expanded from its strict meaning of Aristotle. Aquinas limits the characteristic of the *scientia* only to the point that “from the known things the other things are concluded necessarily”. He uses analogical inference with the dependence in different kind of *scientiae* (studies), and concludes that theology is a *scientia* that assumes principles (the starting points) that the faith provides as principles (the starting points) that “higher *scientia*” provides.

In article 3, the condition for the proper “use” of philosophy for theology is clarified.

In article 4, the legitimacy of the use of difficult language in the theology is considered.

In the question 2, the importance of “the faith” as “the starting point” is emphasized. And the research continues to the question 3 discussing legitimacy of the “faith” itself as the subject.